サイエンスカフェ

第四十回以降、丸善名古屋栄店から名古屋市立大学桜山キャンパス内のカフェ「サクラ サイド テラス」に会場を移して、毎月第三日曜日に開催しています。

第三十九回　二〇一〇年九月十九日
テーマ
「青年の自立と家庭・地域の教育力」
講　師　久保田健市 准教授

バブル期以後、日本の教育は問題解決能力・コミュニケーション能力に代表される新しい能力観を反映した改革圧力と、若者の凶悪化論に対応する形での公共心の育成を求める圧力にさらされている。そして、両者はともに地域や家庭での教育をよりいっそう重視する点で共通している。本講座は筆者が参加した本研究科の研究グループと名古屋市子ども青年局青少年自立支援室との共同調査で得たデータから、家庭・地域での教育的関わりと上記の教育的課題との関係を分析した結果を中心に展開された。結果として、厳しいしつけよりも、親が子の相談にのるなどの関わりの方が公共心の高さと関係があること、わずかではあるがコミュニケーション能力の高さが学歴階層や収入階層と関係があることなどがわかった。おおむね講座は好評であったが、参加者が少なく、「もっと多くの人が受講すればいいのに。もったいない」との感想を頂けたのはありがたかった。

久保田健市（人間文化研究科准教授）

第四十回　二〇一一年四月一七日
テーマ　「台湾と博覧会」
講　師　山田　敦 教授

八重桜満開の中、やまだあつし先生の「台湾と博覧会」を受講しました。日本統治下時代に催された台湾の博覧会は時代の象徴でもあり、経済発展の模索と共に国民を啓発し、内外の日本人に統治成果を宣伝する施策であったことを知りました。

一九〇〇年代に開始された台湾の博覧会は、一九三五年の「始政40周年記念博覧会」が最後の最大規模となり、その様子を当時の新聞と鳥瞰図を用いて解説してくださいました。本国と植民地を結び付ける絆にもなっていた博覧会でしたが、博覧会会場では四十年間の統治による経済効果が強調され、また台湾教化がいかにして行われてきたかが示されていたようです。

面白く感じたことのひとつは、博覧会会場が公会堂や幹線道路を封鎖して作られ、水族館やコドモノクニなどを含む既存公園もそのまま会場として利用されたことでした。予定時間いっぱいの質疑応答はかなり専門的な領域でなされ、改めて学問の奥深さに気付きました。また講座企画をなさっている先生方の姿勢から、サイエンスカフェは講師の先生、受講生、参加者全員で学び合う教育の現場であり大学の姿を見る思いがして心も広がりました。なお、会場であるサクラサイドテラスのお菓子は美味、コーヒーのお代わりもできて嬉しく感じました。

浅野才子（市民）

第四十一回　同年五月一五日
テーマ
「沖縄の日本復帰の日にちなんで
―復帰39年の意義―」
講　師　阪井芳貴 教授

五月十五日、「沖縄日本復帰の日」、その当日に受講する阪井先生の講義はとても有意義なものでした。まず、復帰を考える前に沖縄近現代史を知るということで、沖縄が四つの時代を経てきた

こと、それは常に外部からの力によって支配される歴史であったことが説明されました。そして「沖縄」と「日本」双方から見た互いの関係や、今沖縄が抱えている問題点などをわかりやすく説明していただきました。

先生ご自身が基地の近くに住んでいた経験もあり、沖縄とは「戦争の見える島」である、とおっしゃった言葉は非常に重く心に残っています。私たちは、癒しの島・美しい楽園というイメージを沖縄に求めていますが、それはほんの一面で、実際には基地問題や環境問題が深刻であることは、昨今の報道で少しは理解しているつもりでした。しかし、「生活圏に基地があるということは、住民の日常生活と〝戦争〟が隣り合わせであること」という現実を示されたとき、自分の認識不足を強く感じました。そしてこの現実を多くの人が認識し、沖縄だけの問題ではなく日本国民全体の問題として考えなくてはならないと改めて感じました。また、「日本復帰に際しての沖縄県知事のことば」の中で、沖縄県人の悲願であった復帰が決まったことへの感激の言葉が述べられている反面、「必ずしも願望が入れられたとは言えない」「これからもなお厳しさが続き新しい困難に直面するかもしれない」という複雑な思いが述べられており、手放しでは喜べない当時の人々の感情を知りました。そしてそれが三十九年経った今でもほとんど解決されずに残っていることを考えると、とても申し訳ない気持ちになりました。

沖縄に対する無関心、無理解を無くすにはどうしたらよいか？なかなか答えは出ませんが、自分のできる範囲で真実を知り、それを誰かに伝えられるようにこれからも勉強したいと思います。

斉藤なつ江（市民）

第四十二回　同年六月一九日

テーマ

「according to plan と according to the plan の違い

―英語表現の奥深さを探る―」

講　師　日木　満　教授

サイエンスカフェに通い始めて三年が経ちました。毎回分野の異なる講義を、興味深く聴かせていただいています。今回は現在通っている「市民学びの会」の英字新聞を読むクラスで、毎月悩まされている「英語と日本語の根本的な違い」に迫るものとして、期待してまいりました。

冠詞によって意味が変わる名詞の個性を少しでも理解できれば儲けものと思っていましたが、異なる七つの名詞形がなぜそうなるのかについて今後も悩むことになりそうです。

今回『名詞的名詞』と『動詞的名詞』の分類について、日木先生の懇切丁寧なご指導をいただいたことは、私にとって大きな収穫でした。

英語を習い始めてからすでに六十年以上が経ちますが、改めて「表現の奥深さ」を実感した二時間でした。

北村　彬（「市民学びの会」会員）

第四十三回　同年七月一日

テーマ

「日本の古代寺院と韓国の寺院」

講　師　吉田一彦　教授

吉田一彦先生による「日本の古代寺院と韓国の寺院」と題したサイエンスカフェは、想定していたよりもずっと専門的な研究成果の報告であり、まるで学会のようなアカデミックな内容であった。しかし、明るく明快な小気味よい口調で、論理的な説明を鮮やかに語る先生の姿を目の当たりにして、学問の本質的な愉しさを感じることができた。

仏教は、一世紀頃中国に伝えられ、四～五世紀に朝鮮半島へ、そして六世紀に百済から日本へと伝来した。考古学上、日本最古の寺院と目される飛鳥寺を筆頭に、古代寺院の伽藍配置・塔の形状・基壇・礎石・心礎・勾欄・瓦・舎利容器などを朝鮮半島のものと比較検討して、六～七世紀の日本の仏教に百済・新羅からの強い影響関係があったことをすっきりと説き明かした。

また、仏教受容当時の実態を考えていくことで、これまで私たちが常識のように覚えてきた歴史が全てではなく、まだ解明されていない問題やもう一度考え直さなけ

ればならない問題があることを提示した。例えば、『日本書紀』の記述で、仏教伝来が百済の国から蘇我氏へ行われたと読み取れることをどう理解すべきか。日本史の教科書で「四天王寺式伽藍配置」と記憶してきた、門・塔・金堂・講堂が南北に直列に配される伽藍配置が、実は新羅の四天王寺の双塔式伽藍配置と異なるもので、まぎらわしい名称である、等々。興味深い指摘が何度もなされ、あっという間に時間が過ぎてしまった。真実の姿を知りたいという根源的な欲求が、ますます強くなるサイエンスカフェであった。

柴田憲良（人間文化研究科博士前期課程院生）

第四十四回　同年九月一八日

テーマ

「東日本大震災と防災・減災まちづくり」

講　師　山田　明　教授

東日本大震災という衝撃から半年。次第に、日常会話の中から「震災」という単語が減ってきたこの時期に、実際に現地訪問を重ねている山田教授による講演が行われた。

今回の内容は主に、被災地の現状報告から始まり、阪神大震災との比較やフクシマの原発の問題、これに関連した従来の国策の影響についても言及されていた。小泉政権下で大規模に行われた市町村合併によって、周辺部化した地域の復興が遅れていること。菅前政権における原発対応が批判されたが、そもそもフクシマの問題の端緒となったのは自民党政権の時代であり、それを批判しなかったマスコミも問題だったのではないか、など。いずれにおいても、「被災」者がじつは国策による「被害」者でもありうる、という点に関しては特に考えさせられた。

現在、次なる国策として、被災地復興を叫びながらも、国民への説明責任も果たされないままＴＰＰが前進しようとしている。第一次産業の支え手でもあり、かつ、《職》が大きな課題となっている東日本の被災地に対して、どのような影響をもたらすことになるのだろうか。国全体への影響とともに、議論を重ねる必要性を感じるところだ。

当時は、津波の映像を画面を通じて見るだけでＰＴＳＤになってしまう、と懸念されたほどの今回の大震災とは言え、日数の経過とともに人々の記憶も関心も薄れていく。このような現状の中で、被災地の復興のためにも、この衝撃をいかにして風化させずに次世代へと繋いでいくのか。また、十数年以上前から東海地震の危険性を叫ばれている私たちの地域においては、この衝撃から何を学び何を活かすべきなのか。まちづくりのあり方にとどまらず、一般市民の意識や議論における減災への取組みも検討される必要性を感じた。

天野知亜紀（人間文化研究科博士前期課程院生）

第四十五回　同年一一月二〇日

テーマ

「社会福祉をめぐる動き（ここ40年あまりの日本の動き）
―同時代を生きてきて―」

講　師　吉村公夫　教授

人口減少、少子高齢化と言われる現代、社会福祉への関心や重要性はますます高まっているのではないでしょうか。

この度のサイエンスカフェでは、先生が研究に携わってこられた、一九七〇年以降の四〇年間にスポットを当て、社会福祉分野の法整備の歴史や制度の変遷をたどりました。いくつかの〝転換点〟を概観する中で、こうした現代、そして近い将来の日本の社会福祉を考える、有意義な時間を過ごすことができました。

特に印象深かったのは、一九八六年に国際社会福祉会議が東京で開催された時のエピソードです。会議参加者が特別養護老人ホームを視察した際、「寝たきり」の現状に驚いたとのこと。海外では、高齢者は亡くなる前まで「生活」する時代、目前の光景は病院同然でした。以降、「寝かせきり」と表現したそうですが…日本におけるソーシャルワーカーの資格創設につながり、これを機に少し前進し

たと言えます。また、社会福祉制度・政策は、諸外国の動向や、その時々の政治に大きく影響を受けているということも、実感しました。

そして、「法令や制度の整備がすべてではない」ということを、改めて考えた機会でもありました。法令をいかに運用していくのか、現場（利用者、市民）の小さな声をいかに国へ届け、国全体での改善へ結び付けていくのか、行政が常に背負う課題であり、果たしていくべき役割だと思います。

講話の最後には、先生から、今、農作物や工業製品等への関税で話題となっているＴＰＰについて、医療も議論の対象になり得るとのお話をいただきました。規制緩和により、公的医療保険制度は崩壊しかねません。社会福祉が政治のツール等になることなく、より必要性の高い方々が、より質の高いサービスを受けられるものであって欲しい、そう願ったひと時でした。

松永亜紀（人文社会学部卒業生）

第四十六回　同年一二月一八日

テーマ

「日本型父母教育論を構想する
―子育て支援研究の発展方向を模索して―」

講　師　丹羽　孝　特任教授

「父母教育論」という聞き慣れない言葉に惹かれ参加した。

丹羽先生は現在、研究活動のひとつとして、韓国の保育者養成課程で必須科目となっている「父母教育論」の「日本型」を構想されており、今回は、その序説として、日本で父母向けに出版されている様々な雑誌や一般書の分析から、日本の「父母教育」の現状を講義された。

日本の父母向けの出版物は「賢い子を育てる」ための「テクニック論」や「早期教育論」が多く、それらに対する研究者による評価が不十分であるとの分析であった。

今回の講義を聞き、保育所や幼稚園が「親が親になる」ための役割をよりよいものにし、親と子の相互理解をよりよいものにするために「日本型父母教育論」を確立が必要であるということを、私自身「子育て支援」を研究するものとして、また、子どもを保育所に預ける親として、強く認識することができた。

膨大な資料・文献を集め、韓国の「父母教育論」の教科書を3冊も翻訳して下さった丹羽先生に感謝致します。

下方丈司（人間文化研究科博士前期課程院生）

マンデーサロン

二〇一〇年一二月二〇日
テーマ
「開発事業の記憶と地域活性化：御母衣ダム質問用紙調査の単純集計データ（速報値）報告」
講　師　浜本篤史 准教授
浜本研究室学生

今回のマンデーサロンは、浜本篤史先生の担当回ということで、私たち学生二名も報告に参加させていただきました。報告内容は、二〇一〇年一一月～一二月に岐阜県高山市荘川町、白川村の住民の方を対象で実施した「御母衣ダムの社会的影響と地域活性化」という質問紙調査の集計速報です。これは今年、建設五〇年を迎えた御母衣ダムについて、地元の地域社会にはどのような影響があったのか、またこれからの地域活性化に対して住民の方はどんな思いを持っていらっしゃるのか等を目的として、春から行ってきた調査の一環で実施したものです。

質疑応答の時間には、人社の先生方や調査でお世話になっている関係者の方々から、調査データの分析方法や今後の研究方法に対して貴重なご指摘をたくさんいただきました。研究室の中での活動ではみえなかった視点や発想を得ることができ、非常に有意義な時間になりました。

早水　緑（人文社会学部生）

二〇一一年二月二一日
テーマ
「『死の商品化』とジェンダー―「生命保険」と家族・ライフコース変動―」
講　師　安藤　究 准教授

『死の商品化』と聞いて何を想像するだろうか？今回のマンデーサロンは、安藤究先生の、人の死にかかわる商品＝「生命保険」と家族・ライフコースをテーマにした研究報告であった。

日本における生命保険の特徴の一つは、戦後の高度経済成長期、家族の稼ぎ手の中心が成人男性となり、その稼ぎ手を失った場合のリスク回避のため「終身保険」へと主力商品が変わったことである。もう一つは、販売エージェントの女性化である。日本の保険外交員に女性が多いのは、雇用の安易性という理由だけではなく、女性に優位性があるのではないかというのが安藤先生の仮説である。なかでも各家庭を定期的に訪問する女性外交員が地域のネットワーカー的な役割を果たしていたのではないかという視点は興味深い。死にかかわる商品を扱うエージェントがいかにして個々のクライアントと信頼を築き、地域コミュニティのかけ橋となり得たのか。今後も研究は続くそうだ。さらなる成果を心待ちにしている。

伊藤静香（人間文化研究科博士前期課程院生）

同年三月一四日
テーマ
「ジェンダーの視点から考える民法の婚姻規定―世間の「常識」と憲法理念―」
講　師　菅原　真 准教授

本日のテーマは「ジェンダーの視点から考える民法の婚姻規定―世間の「常識」と憲法理念」であった。講師の菅原先生の話と、参加者の意見表明があった。

先生から参加学生に対する「あなたにとって最も大切なものは？」の質問から始まる。統計数理研究所「日本人の国民性調査」アンケートでは、この問いかけに対して圧倒的に多いのは「家族」であることが判明。ところがその家族の中での女性の位置は、過去および現在においてどのようなものであったか、またあるか。第二次世界大戦が終わるまで、「家」維持を目的とする旧民法下、女性は「三従」を強いられてきた。女性の一生は、まず親に、次いで夫に、老いては子に従うことが求められた。戦後、日本国憲法が制定され、二四条によって不完全ながらも男女平等が実現した。それに伴う民法改正（一九四七年）によって両性の平等と理念とする法体制ができた。

しかし、現在も多くの課題が生じている。その主なものは、①女性のみ再婚禁止期間があること、②夫婦別姓を望むカップルがいても法律上はそれができないこと、③婚外子の相続分に差があることである。以上につき、説明があり、その後参加者からいくつかの意見表明（質問を含む）があった。主な意見表明（質問）を以下に記す。

(1)「男女平等」についての批判があるときくが、法律家としてどう考えるか。

(2)子どもは社会で育てるべきだと考えている。婚姻外の子についての差別があるが、それがなくなると家族関係の維持に問題が生じるというが、どう考えるべきか。

(3)憲法二四条における「個人の尊厳と両性の平等」と一三条の「すべて国民は、個人として尊重される」との関係は。

参加した私の感想―参加者全員がこの問題に深く関心を持っていることがわかった。問題が多岐にわたっているため、後の質疑応答の時間が不足したように思われる。

水野　清（人間文化研究科研究員）

同年五月一六日

テーマ

「ソーシャルワーカーは誰／何を支援する専門家なのか？

―「倫理的に危険な商売」の仲間入りを果たした医療観察法下におけるソーシャルワーカーの役割」

講　師　樋澤吉彦 准教授

「ソーシャルワーカー」のタイトルに興味を持ち、久しぶりに参加したマンデーサロンだった。本講演は、医療観察法の成立による、ソーシャルワーカー（SW）、特にPSW（精神保健福祉士）の役割に関しての問題提起であったといえよう。「簡単にいえば、『余計なお世話』と『余計でないお世話』の境界はどこにひかれるのか？ということである。」とレジュメの一節にある。精神保健福祉分野における介入の問題を学ばせていただくよい機会となった。樋澤先生は結論の一つとして「PSWが本法における強制処遇に内包する「社会防衛」的意味と「生活支援」的意味の両義性を消極的に肯定していること」を挙げられていた。個人的な体験であるが、保護観察所からキャリア支援を依頼されている私にとって、この「社会防衛」と「生活支援」という言葉はたいへん示唆的であったことを付記しておきたい。保護観察中の少年の面談に際しては、同僚から「社会防衛」上のリスクを再三指摘され、他の利用者と同様の「生活支援」を行うことの困難さを実感した次第である。

重原厚子（人間文化研究所特別研究員）

同年六月二〇日

テーマ

「保育における「スタイル」を考える：保育者は乳児にどうかかわるか？」

講　師　上田敏丈 准教授

発表内容は、保育者それぞれが持つ雰囲気という漠然としたものを客観的に表すことができないか、という視点から、保育者の子どもとのかかわり方の特性をティーチング・スタイルとして分類し、そのスタイルの違いが保育の援助にどのように影響するのかについて、実際の保育の観察を通して明らかにしていこうとするものであった。

ティーチング・スタイルは①活動に対し褒めたりうなずいたりして対応する「反応的」スタイル、②活動を指示したりすることが多いが対応は一貫、平等である「指導的」スタイル、③積極的にはかかわらず、待ち、見守る「応答的」スタイル、④情報を提供し、教えていく「教授的」スタイルの4つに分類され、「指導的」「応答的」スタイルの保育者が保育活動中の観察（片づけの場面、製作活動の場面、いざこざ場面）を通して、保育援助の違いについて考察している。その結果、保育者の子どもとのかかわり方について「指導的な関わりはよくない」「応答的に関わらなければならない」というようなステレオタイプの考えではなく、いろいろなタイプの保育者がいて、それぞれの特性を活かした保育援助を考えていくことが必要であるという結論であった。

フロアから、親のしつけ意識は文化によって異なっていると思うがどのように影響するか、また、幼児教育以降への継続性の問題はどうかなどの質問があり、活発な討論がなされた。保育の現場での豊富な観察を通したこのような実践的な研究は、人文社会学部の保育士・幼稚園教諭を目指す学生が保育者像を構築する上で、あるいは大学院生が教育に関する研究を進めていく上で大いに参考になるであろう、と期待を抱かせてくれた。

野中壽子（人間文化研究科教授）

同年七月一一日

テーマ

「響き合う文学的想像力

―人間文化研究叢書第1巻『反響する文学』刊行を記念して―」

講　師　土屋勝彦 教授・田中敬子 教授・山本明代 准教授・谷口幸代 准教授

人間文化研究叢書第一巻として刊行された『反響する文学』の主題は、〈越境文学〉としての〈世

界文学〉です。世界文学とは従来、一義的には〈国民文学〉を指すものだったが、移民などに見られる「移動する人」の視点、つまり、自らの属する、あるいは、属することを強いられた社会の歴史や文化を相対化する視点を無視しては、現代の〈世界文学〉を捉えきれないのではないか。『反響する文学』はこうした観点から、〈国民文学〉を異化するものとして〈世界文学〉を位置づけ、その最も顕著な例として、移民・移住の経験や複数言語の使用に特徴づけられる、〈越境作家〉たちの文学の諸相を示すものです。

サロンでの議論は、同書の内容と同じく示唆に満ちたものでした。特に、一つの土地にとどまり一つの言語で書く書き手の作品は〈世界文学〉となりえないのか、〈越境作家〉といえども国民としての意識を持たないわけではないのではないか、といった問いを巡り、刺激的なやり取りが交わされました。その中で示されたのが、文学の本質としての〈越境性〉という視点です。何らかの帰属意識を持ちつつも、他者性や異質なものを自らに取り込むことによって、それまでの意識を更新してゆくことが〈越境〉なのであり、それは地理的移動の経験や使用言語によってのみ実現されるのではない――このような補助線をもって、今度は一言語の書き手や〈国民文学〉の代表選手たちの作品を読み直すとき、どのような風景が見えてくるのだろうかと、楽しみに思うサロンでした。

福岡麻子（名古屋市立大学非常勤講師）

同年一〇月一七日

テーマ

「『百科全書』よ、お前もコピペか?! ―フランス『百科全書』の典拠をめぐる新研究―」

講　師　寺田元一　教授

まずは寺田先生、二時間にも及ぶ貴重なお話しお疲れさまでございました。十八世紀フランス『百科全書』については、院生だった時期に寺田先生のゼミで学びはしましたが、十分にその全体像・概念がつかめないままでした。十八世紀フランスにおける『百科全書』の出版がいかなる意味を持ち、また今日現代においても研究対象として多くの研究者がそれになぜ携わっているのか、『百科全書』自体についてかなり理解する事ができました。

特には、マンデーサロンのタイトルにある「お前もコピペか?」にはサロン出席前までは、百科事典のたぐいの書においては、一般に使われている「コピペ」の意味とは全く同一ではないが、専門書ではない故、他の専門テキストや専門家からの知識の引用・導入は当然ではないかと思っておりましたので不思議な感覚でした。

しかしサロン当日資料の中にある、「4・むすびにかえて」で紹介されているディドロ執筆による全書項目「折衷主義」―偏見、伝統、古さ、普遍的合意、権威、つまりひとくちに言って、多くの精神をおさえこんでいるあらゆるものを踏みにじることによって、自分自身で考えることや、もっとも明白な一般原理に立ち帰ってそれを検討し、議論することや、自分の体験と理性の証言のもとづくもの以外は認めないことなどを敢行する―、とか「混合主義」―折衷主義者は誰も味方せず、諸見解をこの上なく厳密な討議に付し、それ自身で明証的な概念に還元できると思われるような命題しか体系から取り入れない―などは私が今取り組んでいる十七世紀後半から十八世紀の、後に理神論者と称される人々例えばジョン・トーランド、アンソニー・コリンズなどが、ローマカトリック教に反論して唱える反カトリック教理主義との文脈に多くが重なり驚いているのと同時に、両者に共通する人間理性を重視した近代合理主義の立場に立った知識の普及・啓蒙活動に大きな役割を果たしたことを実感できたことです。そして今まで多くの人が携わり現在においても続く『百科全書』研究活動というものが、いかに多くのエネルギーを必要とし、奥深いものかが想像でき感銘いたしました。

寺田先生の典拠の新発見もかかる活動の結果だということが理解できました。最後に『百科

全書』の出版は、当時の社会環境、諸書籍保全、印刷技術などを考えると、いかに大偉業であったかが、再確認できたことです。

服部篤睦（人間文化研究科研究員）

同年一一月二一日、一二月一二日

テーマ

「東日本大震災から学ぶ　被災地を訪ねて　写真&トーク」

講　師　本学ボランティア学生・院生・修了生ほか

一一月二一日と一二月一二日の両日、東日本大震災をテーマに恒例のマンデーサロンを開催した。二〇一一年三月一一日に東日本を襲った大震災は、東北地方を中心に甚大な被害をもたらした。大震災から八か月ないし九か月を経過した時期に、被災地を訪ねた人に現地報告をしてもらう、「東日本大震災から学ぶ」という企画である。当初は報告者が集まるか不安であったが、二日間で八人の報告者があり、パートⅡでは報告時間が足りないほどで、院生・学生をはじめ多くの参加者があり盛況であった。

八人の報告を詳しく紹介することはできないので、とくに印象に残ったことを記す。報告者の大半はボランティアに参加して活動してきた学生・院生・修了生などである。報告された主な被災地は岩手県の大槌町・陸前高田市・宮古市、宮城県の石巻市・山元町である。報告はいずれも生々しい写真により、被災地の厳しい現実や現地での活動を紹介するものであった。企業ボランティアに参加した学部三年生は、被災地を「実際に自分の目で見たい」とボランティアに申し込んだ。主催者が活動に「満足しましたか」と述べたことに疑問を感じた。ボランティアは自己満足のために行うのではないと、ボランティアのあり方に問題を投げかける。それとボランティア仲間をつうじて「何かしたい」という人の思いの強さを実感したという。

ボランティア活動の多くは、がれきの処理や側溝の清掃など「力仕事」だが、大学院を修了したNPO職員は被災者の話を聞く活動に参加した。話し相手になることにより、被災者に寄り添うことの大切さを強調し、「ともかく来てほしい」という現地の声を伝える。このほか、福島原発周辺の現実を写真でリアルに紹介した報告、ゼミや寺院でのボランティア報告なども印象に残った。

全国社会福祉協議会（全社協）のまとめによると、大震災から約十か月で震災ボランティアは、ピーク時の十分の一まで減少している（朝日新聞二〇一二年一月一三日付）。

全社協は「がれき撤去や泥出しなど人数を要する作業が減ったため」とみている。ボランティアだけでなく、東北の被災地を訪ねることも大切だ。宮城復興支援センター事務局長の船田究さんも読売新聞二〇一二年一月五日付で次のように述べている。そもそも、被災地では力仕事のボランティアの需要は減っている。結果として、外から訪れる人たちが減り、被災地への思いが風化し始めないかが心配だ。「来て」「見て」「買って」「泊まって」もらうのは、風化を防ぎ、復興を後押ししてもらうためでもある。

これからも多くの学生・院生が被災地を訪れ、「東日本大震災から学ぶ」をテーマにした企画を継続していきたい。

山田　明（人間文化研究科教授）

トーキングカフェ

名古屋市立大学大学院
人間文化研究所特別研究員
重原厚子（しげはら・あつこ）

修士論文の中間発表ではいつも冷や汗をかき、書きたいことと書いていることとの隔たりに、自己嫌悪していたのは私だけだろうか。書きたいことをわかりやすく説明することは、現実の「誰か」に実際の説明をすることから始まるのでは？と思ったのがこのトーキングカフェの発端である。

四年目となった今年は、修士一年から常連のMさんが二年となり、研究発表も密度の高いものとなった。Mさんが研究する『熟議』論を留学生や在学中の院生に対して噛み砕いて説明してくれることで、議論も熱を帯びる。彼自身からも、他分野を研究する人に説明することで、新しい視点を学ぶことができたとのコメントをもらった。

同じ時、同じ場所で学ぶ人たちとの縁を活かしたいと願いながら、月に一回人間文化研究所に通っている。

人間文化研究所 二〇一一年度活動

二〇一一年

四・一七　第四〇回サイエンスカフェ、山田敦教授「台湾と博覧会」

五・一五　第四一回サイエンスカフェ、阪井芳貴教授「沖縄の日本復帰の日にちなんで―復帰39年の意義―」

五・一六　マンデーサロン、樋澤吉彦准教授「ソーシャルワーカーは誰／何を支援する専門家なのか?―「倫理的に危険な商売」の仲間入りを果たした医療観察法下におけるソーシャルワーカーの役割」

五・二五　トーキングカフェ

六・六　トーキングカフェ

六・一九　第四二回サイエンスカフェ、日木満教授「according to plan とaccording to the plan の違い―英語表現の奥深さを探る―」

六・二〇　マンデーサロン、上田敏丈准教授「保育における「スタイル」を考える：保育者は乳児にどうかかわるか?」

七・四　トーキングカフェ

七・一一　マンデーサロン、土屋勝彦教授・田中敬子教授・山本明代准教授・谷口幸代准教授「響き合う文学的想像力―人間文化研究叢書第一巻『反響する文学』刊行を記念して―」

七・一七　第四三回サイエンスカフェ、吉田一彦教授「日本の古代寺院と韓国の寺院」

八・一、九・五　トーキングカフェ

九・一八　第四四回サイエンスカフェ、山田明教授「東日本大震災と防災・減災まちづくり」

一〇・三　トーキングカフェ

一〇・一七　マンデーサロン、寺田元一教授「『百科全書』よ、お前もコピペか?! ―フランス『百科全書』の典拠をめぐる新研究―」

一一・七　トーキングカフェ

一一・二〇　第四五回サイエンスカフェ、吉村公夫教授「社会福祉をめぐる動き（ここ40年あまりの日本の動き）―同時代を生きてきて―」

名古屋市立大学・名古屋市博物館・九州国立博物館連携事業「ワークショップでござる」

一一・二一　マンデーサロン、本学ボランティア学生・院生・修了生ほか「東日本大震災から学ぶ　被災地を訪ねて　写真&トークPart1」

一一・二六　研究所開設七周年記念講演会・シンポジウム「文化財を守る」

講演会　藤原徹東北芸術工科大学教授「文化財を守る―東日本大震災の教訓から―」

シンポジウム「文化財を守る―東海大震災に備えるには―」

一二・五　トーキングカフェ

一二・一二　マンデーサロン、本学ボランティア学生・院生・修了生ほか「東日本大震災から学ぶ　被災地を訪ねて　写真&トークPart2」

一二・一八　第四六回サイエンスカフェ、丹羽孝特任教授「日本型父母教育論を構想する―子育て支援研究の発展方向を模索して―」

二〇一二年

二・一九　第四七回サイエンスカフェ、滝村雅人教授「発達障害児者の理解と支援」

二・二〇　マンデーサロン、野田雅子研究員「社会的弱者への食育活動―外国人・障がい者に向き合って―」

三・一八　第四八回サイエンスカフェ、平田雅己准教授「オバマ政権時代の銃器政治と運動事情」

三・一九　マンデーサロン、水野清研究員「ジャン・ジャック＝ルソーにおける国家と自由」

三・三一　人間文化研究年報第七号発行

編集後記

今年は、「博物館と大学の連携」という大きなテーマの二年目でした。東日本大震災は、この「博物館と大学の連携」というテーマにも、否応なく一つの課題を突きつけました。地震に限らず、様々な災害に襲われる日本列島。その中にあって、「文化財」を如何に災害から守るか、そして「博物館と大学の連携」はそこでどのような役割を果たすことが出来るのか。通常の文化財保護活動とは異なった次元での「文化財を守る」という課題に明快な答えを出せたわけではありませんが、その模索を始めたことには一定の意義があるのではないかと思います。

退職される戸田百合子先生に栄養学の見地から書評をご執筆頂きました。先生は研究所の開設以来、お手伝い下さってきました。改めて厚くお礼申し上げます。（安藤究・谷口幸代）

人間文化研究所年報　第7号

発行日　二〇一二年三月三一日

発行者　名古屋市立大学人間文化研究所
（名古屋市瑞穂区瑞穂町字山の畑一番地）

Mail: institute @ hum.nagoya-cu.ac.jp

HP:http://www.hum.nagoya-cu.ac.jp/institute

編集委員　阪井芳貴　安藤　究　谷口幸代

印刷所　株式会社　マルワ
（名古屋市天白区平針四丁目二一一番地
電話　〇五二-八〇二-四一四一）

この冊子は再生紙を使用しています。